

# 眞実と愛の極み

— 教育の根源にあるもの —



森 田 宗 一

(一)

精薄や貧しき人々がうとまれず

幼きころより、この人々にも

正しき導きと神のみ恵が与えられ

死刑が廃止されても、犯罪なき

平和な世の中がうちたてられますように

わたくしにもましてつらき立場の人々の上に

み恵みのあらんことを

キリストの御名によりて……。

これは過ぐる年の十一月二日、ながい死刑囚としての未決生活を終え処刑された島秋人（ペンネーム）が、処刑台でなした祈りのことばである。

澄みに澄みゆく心境をすばらしい短歌に託して多くの人を感動させ、その日常生活において、いつもやさしく心情をもって、その接する人々にも小鳥や草木にも純真な愛を与えていた彼が、愈々明日処刑と知らされたときも従容として次の歌を作ったという。

この澄めるころ在るとは識らず来て

刑死の明日に迫る夜<sup>ぬぐ</sup>温し

土ちかき部屋に移され処刑待つ

ひととき温ぬくかいのち愛いとしむ

処刑直前、役目から立会っている人々にも心からの礼とわびの言葉述べ、被害者の家族にもひたすら罪を悔いていたことをくりかえし、最後のおわびのことばを書き残し、処刑台において死の寸前に冒頭の祈りをなして生を終えたとのこと。わたくしはそのことを東京拘留所長からつぶさに聞き、感動に激しく胸をふるわせた。

島秋人についてはすでに知る人ぞ知るであるし、その処刑直後出版された「遺愛集」(東京美術)は、島秋人獄中八年の歌集であるとともに、人間の魂が闇から光に転化するまことにすばらしい厳やかな遍歴の記録である。罪にうごめく一人の人間の苦悩から光明への苦渋に満ちた旅路、その間に出会い触れ合う人々との手記や手紙や記録。それらのすべてが厳そかなまでの人間教育の明暗を物語るものである。偉大な教育の書だといえよう。

歌の先生である窪田章一郎氏も「遺愛集」の「後記」にこう書いておられる。「島君は少年時代からの人生をかえりみ、いかに教育が大切であるかを痛切に感じ、歌集刊行ののあかつきには、

教育にたずさわる人々に、ぜひ一読を得たいと洩らしていた」

ほんとに人間の教育にたずさわる者が一読し、人間の可能性のすばらしさおそろしき、教育(師)が人間を悪くもよくもすると、人と人との出会いということがいかに不思議なものであるか、深く考えてみるべきである。

島秋人は昭和九年六月二八日生、幼少を満州で育ち、戦後父母とともに新潟県柏崎に引き揚げたが、母は疲労から結核になり間もなく亡くなった。本人も病弱で結核やカリエスになり、七年間もギブスをはめて育ったという。

そういう家庭環境と心身の状況が彼の不幸の背景であったが、それを決定的にしたのは、周囲の人々が彼をうとみ、さげすみ、仲間に入れてくれないことであった。とくに学校の先生の多くが成績が悪い、家庭の悪い子ということで不親切であるばかりか、棒で殴ったり、低能扱いにしたという。それが彼の不良化しぐる直接の大きな原因であったにちがいない。

浮浪非行のあげく久里浜特別少年院にも入れられた。その後も生活の安定を得ず、温くうけ入れてくれる人も家もなく、犯罪をくりかえした。そのあげく昭和三四年雨の夜、郷里にちかい新潟

県小千谷市を徘徊するうち、飢えにたえかねて農家に押し入り二千円を奪い、争つてその家の人を殺し、強盗殺人犯として検挙され、裁判の結果死刑の判決をうけるに至つた。控訴上告したが容れられず、遂に昭和三七年六月死刑確定、ながい未決生活の末、前記のように昨年十一月処刑されたのである。

荒れに荒れ、すさびにすさんでいた彼であつたが、ある人と再会して新しい生へ目ざめ、あることを契機として短歌に精進し、人間としての生の再発見をし、常人の至り難き境地に到達したのである。

## (二)

私が本稿で語りたいのは、闇にうごめく人間の光への転機となつたそのある機縁、ある人との再会のことである。それはいつの世も変わらぬ教育の根本精神であり、真の母的なものの教育的表現である。また人と人との出会いの秘義である。

島秋人は死刑判決をうけたのち、思い出したのは中学の頃たった一度だけほめられたという記憶である。それを忘れかね、そのほめてくれた凶画の先生に獄中から手紙を出した。ところがその

先生の奥さんが短歌をなさり、歌を通じて文通・交渉が始まつた。爾来八年、師弟（正確にいえば先生とくにその夫人とかつての教え子である死刑囚）の温い美しい交わりが続いたが、それは目をみはるばかりである。

私の筆でそれを説明するよりも、その先生の奥さんの短歌をここに紹介させていただくのが真実を正しく伝えることと思う。これは最近その奥さんから私への手紙に添えてあつた数々の歌の中のいくつかなのである。彼は毎日新聞歌壇において、すぐれた歌を発表し、窪田空穂先生というよき短歌の道の師を得、歌壇すこぶる進んだが、手ほどきをしてくれた凶画の先生の奥さんの歌風の影響は、最後まで残っていたように感じられる。

凶画の時間にはめられし夫を忘れかね便りくれしに汝  
は死刑囚

何によりて余命生くるや死刑囚の教え子に歌を詠めと  
文書く

教え子の死刑の罪を詫びなんと来し被害者の家はくず  
屋根

寒き夜は心なやみて眠られずすと聞けばわれも眠

れず

汝が死刑ついに確定となりし日の放心の日よ馬鈴薯の花

今生に生をうけたる幸せを知らで死なせまじと歌すすめ来し

秋づけば淋しからぬや冬くれば獄寥からんとすぎし八年

歌により目ざめし感謝つきぬと吾れへの遺言聞きて泣きけり

処刑されし教え子に代り被害者に詫びる言葉にわれはつまりつ

処刑の朝したためし汝が詫び状に添えて香華の資をおくるわれ

過去を思わず未来も問わで今日一日よく生きなんと被害者の文あわれ

これらの歌を通読しただけでも、教育の心、いのりをこめた母的な教育愛が測々と迫るのを感じることがができる。この歌を添えて私宛にくれたその奥さんのお手紙は、そのことをあまりにも痛

切に教えてくれる。私信をここに多く引用するわけにはいかないが、こんな一節も感動を禁じ得ないところである。

「歌によって目ざめた覚さん（島秋人の本名）が、遂に私共の至り得ぬ境地に至り、生命愛惜の人間性豊かな歌をうたいあげてくれましたことは、私共のつきせぬよろこびでございまして。私どもにとりまして覚さんは肉親も同様、処刑を知らされました時は、数日食事ものを通らぬ思いを致しましたが、歌によって目ざめた自分は本当に幸せであった。この感謝の気持ちを必ず伝えてほしい」という遺言を聞き慰められました。まことに人と人との出会いほど人生において不思議なものはない。覚さんと覚さんとの深い縁によって、覚さんをめぐると多くの心あたたかい方々とお知り合いになることも出来ました。覚さんのお蔭という外ございません。……思えば多くの方々の愛をうけ、深い心の交りをもった覚さんは本当に幸せでございました。一生の半分以上、十八年という長い歳月を少年院獄中で過ごし、人並の幸せとは遠くかわいそうな覚さんでしたが、最後に鈴木和子さんと結ばれたことも神の深いおぼめしと思われ  
ます」

(三)

さてここに出てくる鈴木和子さんとは、島秋人と歌を通じて深く知り合い一度も相会わないのに魂の交流を感じ結婚しようというところまで至った一婦人のことである。しかも十二年前に盲目になり、結核の身を療養所のベットに横たえながら、清く気高い心の生活を続けている方である。

その一婦人と島秋人との間の真実に満ちた愛と希望の消息は、これまた今日の世にあまりに欠けたものである。昨年島秋人処刑の直後、私はこの婦人から思いがけない手紙をうけとり、大きな感動をうけ、五十余年の生涯に一転機を画されたように感じたことである。

その手紙の一節そしてながい文面の要点は、次のようなことである。

「さて彼は亡くなる(処刑される)少し前、私が歩行訓練を許されるようになったと知らせましたら、早速ひとに頼みあたたかいスリッパを送ってくれました。それ程に優しく気づく人だったのです。またそのあとすぐ何か栄養のある物をたべるよ

うにと自分の乏しい小遣いの中から二千円を送ってくれたのです。私は勿体なくてつかわずにとっておいたのですが、彼のあたたかい心をうけて最近バター、チーズなど買わせてもらいました。でもふと彼の心のこもったこの金の一部を何か有義につかいたいと思いつきいろいろ考えたのですが、三十三歳という若きと健やかな体のまま処刑台に消えた愛する彼を思うにつけ、やはり私として前途ある若い人が殺人という大きな罪を一人でももう犯さないようにと切実に願う心で、その私の頭にかんだのは少年院にいる少年たちのことでした。(一日おいて七百円のお金を送られて来た)。この僅かなお金でも彼の優しさのこもっているお金のだし、これをどこかの少年院におくり、花の種や、苗、球根など買ってもらい、やがてその花が咲いた時美しい花を見て少年たちの心が少しでもなごみ、綺麗な花を愛する心が人を愛し自分を愛する心ともなって更生への第一歩となることのできたら私は嬉しい、彼の魂もきっと喜んでくれるに違いない。僅かなお金に私の夢はあまりに大きすぎるかも知れないけれど、私は祈りをこめてどうしてもこのお金を送りたいと思います。でも私は少年院がどこにあるか知らない。さてどうしようかと考えた時、先生のお名前とラジオで聞

いたお話が思い出され、お願いしてみようと思いたったわけなのです。……どうぞ私の願いをおき届け下さいませ。……」

私は、その時以来この病める盲目の婦人の夢と願いができるだけ純粹にすみやかに実現されるように努めてきたわけである。全固いたるところの少年院や不幸な子供の施設にしばむことのない花をうえたい。公私の生活の時間をできるだけ活用して、ポツポツ、テクテク、花うえをしているのである。それは薄幸の生涯の終りを立派なつぐない（罪の）を清澄な境地のうちに全うした島秋人への鎮魂（たましづめ）のためであり、わが魂の浄めのためでもあると思うからである。また彼の魂に再生の転機を与えた旧師夫妻の教育愛人間愛の讃歌のためであり、鈴木和子という盲目の婦人の美しき魂への敬仰のためでもあるといつてよい。

今日人と人との出会いが薄れ、まことの愛と真実が失われていくとき、教育の世界もまことの出会い不在となり、育ての心、真の母心の失われていく姿を傷ましいことと思わずにいられない。倉橋惣三先生を憶う心、切なものそのためである。しかしこの信なき世にも、ここに紹介するような事実があり、そういう人たちもおるといふことは、人間と教育に絶望しないでよいことを示してくれるようにさえ思われるのである。

最後に、島秋人と和子さんの短歌それぞれ一首ずつと私の好きな安積得也氏の詩の一節を記してこの稿を結ぶこととした。真実と愛の極みをそこに見るとともに、それこそいつの世にも教育の根源にあるものだと思ふ。

いのち生くる独りの翳り慕はしく 日向に雑草の萌え  
るを見たり

（秋人）

秋されば盲いのわれの目にも浮かぶサルビアは赤くコ  
スモスは白く

（和子）

はきだめにえんどう豆咲き

泥池に蓮の花が育つ

人皆に美しき種子あり

明日何が咲くか

（「一人のために」より）

（東京家裁判事・お茶の水女子大学）